

〔制作記録〕

## 個展「WOVEN SURFACE」

中 島 俊市郎

ある物が工芸的であるとされる場合、技法や素材をはじめ、その形状や用途、制作背景など多様な視点からそれが工芸的である理由が挙げられるが、工芸の概念や工芸の領域を捉えることは難しい。

工芸とは何を示す言葉なのだろう。この問いへの考察の一環として作品制作に取り組んでいる。今回は、その発表の機会として平成17年10月9日から30日に渡り、「城端織館」（富山県南砺市城端）において、「WOVEN SURFACE」と題した作品展を開催した。

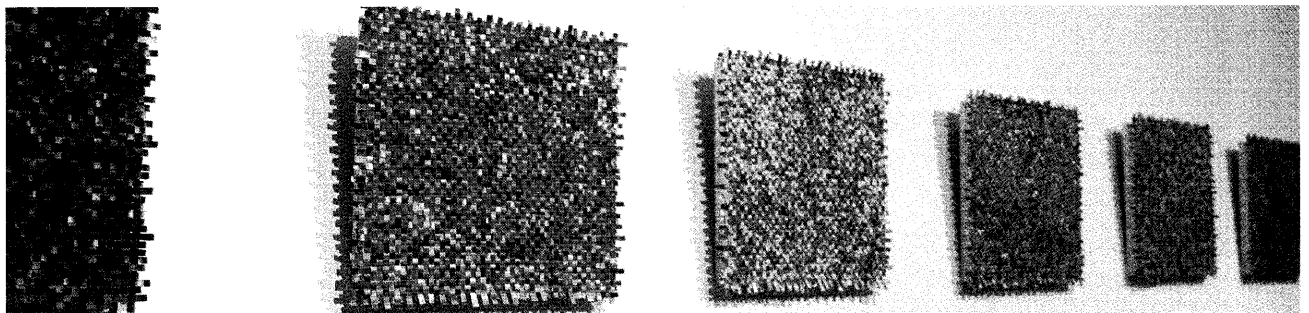
展示会場となった「城端織館」というスペースは、昭和3年に建築された美しいレンガ造りの建物で当時の城端織物組合の事務棟を改修し、城端で絹織物産業が盛んであった事を今に伝える施設として平成15年春にオープンした。この地では約400年前の天正年間に絹織物が始まったといわれ、元禄年間には、町の約半数以上の家庭が機織りに従事した。そしてこの地の絹織物は『加賀絹』として京都の絹問屋と取引され、京都から江戸へ渡ったといわれ、加賀藩経済の一端を担う重要な産業であった。またこの町は、現在京都にある川島織物の創業者、川島甚兵衛発祥の地でもある。

このような織物にまつわる歴史と伝統の厚い土地

で展示会を行う事が、私には恐れ多いことのように思えたのだが、私なりの織物への視点を表すことで、この土地への敬意を示したいという思いで制作に取り組んだ。

この展示会では合計12点の平面作品を展示した。図案が染色された布を帯状に切ったものを、経糸と緯糸に見立て、それを平織りしたものである。この作品は織物制作における大きな要素の一つである組織に着目し、その魅力を引き出すことを課題とした。経糸、緯糸が規則的に交差することで組織が生まれるが、経糸、緯糸がかわるがわる上下に動く様子の魅力を、色彩と図案の効果を利用して表す事を試みた。製作過程ではあらかじめ、コンピュータで製織後の状態をシュミレーションしながら、経糸と緯糸にあたる部分の図案と色調を検討し、こうして構成された図案データをポリエステル生地にインクジェット染織機でプリントし、その生地を帯状に切り、コンピュータ上でのシュミレーションに従い製織した。プリントされた布を製織する手法は今回初めて試みたが、多様な展開の可能性を感じている。今後もし取り組んでゆきたい手法のひとつである。

(なかしま・しゅんいちろう 工芸／染織)





展示風景 『SILENCE series 1 -5.1/A-F』 ポリエステル、インクジェットプリント、平織 2005